立命館大学

国際平和ミュージアムだより

vol.17-1 2009.8.11

CONTENTS

2・スポット 防毒面のカフスボタン

3・巻頭つれづれ
あらためて問われる非戦・非差別の思想
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長 安斎 育郎
〔立命館大学国際関係学部教授〕

5・館長だより 国家･民族、自立と共存の愛国心
立命館大学国際平和ミュージアム館長 高杉 巴彦

7・ミニ企画展 開催報告（2009年4月～7月）

8・ここが見どころ
ベトナム戦争とアジアの未来
ー「民衆主義」と「女性力」ー
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 桂 良太郎
〔立命館大学国際関係学部教授〕

9・運営委員リレー連載 博物館からの情報提供に求められるもの
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 八村 広三郎
〔立命館大学情報理工学部教授〕

11・ミュージアムおすすめの一冊 藤木久志著『新版 雑兵たちの戦場：中世の傭兵と奴隷狩り』
（朝日新聞出版 2005年6月10日刊）

12・事業報告 2009年度春季特別展 岡部伊都子回顧展

15・事業報告 映画「アメリカばんざい～crazy as usual」上映会

17・平和へのメッセージー常設展示見学者の感想ー

18・2008年入館者状況（2008年4月～2009年3月）、編集後記

19・ミュージアムインフォメーション

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

防毒面のカフスボタン

カフスボタンとは、ワイシャツやブラウスの袖口を止めるボタンのことです。17世紀のヨーロッパでは、袖口に飾りをつけるために用いる上流階級のオシャレでした。19世紀になると、一般の人々の間でも使用されるようになり、ダンディな紳士のたしなみというイメージが定着したようです。カフスボタンは和製英語で、英語ではカフリンクスと言います。

「防毒面のカフスボタン」は、本来は二つで一組のはずですが、1つしか残っていません。なぜ片方は失われたのか、いつ、誰が何の目的で製造したのか詳しい事は分かっていません。しかし、防毒面（ガスマスク）をかたどったデザインが印象的です。ボタン部分は面体（マスク部分）、ボタンホールの反対側の留め具は防毒面から吸収缶へ延びる管という凝ったデザインです。

ガスマスクは化学物質などに汚染された環境での作業や、毒ガス攻撃を受けた際に着用するものです。日本の歴史の中で防毒面が大量に生産されはじめたのは昭和10年代、化学兵器による攻撃を想定してのことです。

化学兵器が登場したのは第一次世界大戦です。ドイツ軍がイープルで敵陣に毒ガス攻撃を行ったのが毒ガス戦の始まりでした。日本軍もこれを見て化学兵器の研究を開始しました。731部隊などによる残酷な人体実験は有名ですが、日中戦争がはじまると実戦で使用しはじめ、戦争の激化とともに毒ガスの使用もエスカレートさせていきました。国内では大久野島で本格的な毒ガスの生産を行いました。

国民向けには、空襲に備える防空活動の中で毒ガスに対する教育がおこなわれました。民間向けの防毒面も生産され、家庭でも防毒面を購入して備えるようすすめられましたが、一世帯にひとつというものでした。また、当時を知る人々からは、息苦しくて10分もつけていられなかった、高価で買うことができなかったという話も多く聞きます。実際には毒ガスから国民を守る手だてはなかったわけですが、防空教育を通じて、防毒面は一般の人々にとっても、身近な存在となりました。

さて、「防毒面のカフスボタン」ですが、このようなものをカフスボタンのデザインに用いることにはどのような意味があったのでしょうか。防毒面の宣伝や、防毒面生産の記念として作られたのかも知れませんが、このようなデザインが成立したことから、すでに防毒面がある程度一般に認知されていたことがわかります。また、このデザインを身近な装飾品に採用したことは、防毒面の象徴する化学兵器を「飼いならす」作業でもありました。昔から目新しいものや珍しいもの、時には異形のものは装飾品や調度品に取り入れられてきました。そこには、そうしたものが持つ威力や恐ろしさを自らのものとして誇示する効果があります。その一方、小さくすることで「かわいらしさ」や「親しみやすさ」を出し、恐ろしさをそぎ落とす効果もあります。私達は実物の戦車を見れば「恐ろしい」と感じるかもしれませんが、携帯電話のストラップに小さな戦車が付いていれば、「かわいい」と感じます。この「防毒面のカフスボタン」がそのような効果を狙って作られたのかは定かではありませんが、防毒面がカフスボタンという小さな装飾品にされたことで、日常生活の中に防毒面とそれが象徴する化学兵器が持ち込まれ、人々の間に受け入れられていく役割を果たしたのではないでしょうか。戦争の宣伝は、大音量の放送やあからさまに忠誠を要求する宣伝文句だけではありません。

（学芸員　兼清順子）

防毒面のカフスボタン

縦／1.8cm　横／1.2cm（ボタン部分）
長さ／2cm（とめ具部分）
年代／不明
寄贈者／池垣喜資子

参考：
防空用防毒面（昭和15年製造）［左側］と防毒面のカフスボタン［右下］

あらためて問われる非戦・非差別の思想

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長　安 斎 育 郎
（立命館大学国際関係学部教授）

北朝鮮の核実験についての声明

私は、2009年5月25日に行われた北朝鮮の核実験について、館長との共同声明を発表し、3つの懸念を表明しました。

第1は、核実験の規模などの基本情報がしっかり確定できない時期に、「長崎原爆級の核実験」といったイメージがマスコミを通じて一人歩きしかねないことです。核爆発の威力は発生した地震波から推定するのですが、北朝鮮の実験規模の推定値には10倍の開きがありました。真実を見極めるべきその時期に、曖昧な根拠のまま過大な威力を印象づけることになれば、いたずらに緊張を煽り立て、世論の軍事化を招きかねません。私たちは、事実関係を慎重に見極めた報道姿勢を期待したのです。

第2には、来年のNPT(核不拡散条約)再検討会議を前に、アメリカのバラク・オバマ新大統領が「核兵器のない世界」を展望する姿勢を国際社会に明らかにしたこの時期に、北朝鮮が核脅迫外交に踏み入ろうとしていることへの批判です。

第3に、今回の北朝鮮の核実験が、4月5日のいわゆる「飛翔体打ち上げ実験」ともども、日本の世論を「軍事力強化による防衛」という方向に傾斜させ、核エネルギーの平和利用を定めた原子力基本法や非核3原則を蔑ろ（ないがし）にして、日本の核武装論をさえ誘発しかねないことへの深い憂慮です。私は、北朝鮮の挑発的行為に呼応する日本の世論の軍事化が、この国の進路を誤りかねないのではないかと心から懸念しています。

6月4日、私は、「兵士・庶民の戦争資料館」館長の武富智子さんに請われ、「12周年記念彼我戦争犠牲者追悼法要式典」に次のようなメッセージを送りました。

「過去の戦争の悲惨な実態が人々の記憶から遠のくにつれて、現在の社会のありようの中に戦争に向かう気配を鋭敏に察知する感性が鈍化しつつあるように感じています。北朝鮮による4月の飛翔体実験や5月の核実験は、PAC3配備など、政府によるこれ見よがしの軍事的対応とも相俟って、日本の世論に『備えあれば憂いなし』の風潮を作り出し、軍事主義的な傾向を強める危惧があるものと心配しています。この時に当たり、平和資料館が過去の戦争の実態を誠実に伝える努力を続けることが、極めて重要になっていると言わなければなりません。」

ホロコースト記念博物館の悲劇

ところが、それから僅か1週間後の6月11日（アメリカ時間6月10日）、ワシントンの「ホロコースト記念博物館」で「黒人警備員射殺事件」が起こったのです。私と高杉巴彦館長は、この事件についても、大意次のような共同声明を発表しました。

2009年6月10日、アメリカの首都ワシントンのユダヤ人虐殺問題に関する「ホロコースト記念博物館」で、黒人警備員が白人至上主義者に射殺される事件が起こりました。

アメリカ史上初めて非白人系大統領が登場し、「反ユダヤ主義と人種的偏見」に対する警戒を国民に呼びかけたばかりですが、アメリカ社会には今なお1000近い人種差別団体があると伝えられています。今回の事件は、ジェームズ・フォンブラン容疑者の単独犯行と考えられていますが、同容疑者は、「アメリカ社会の金融はユダヤ人によって支配されている」という狂信的な信念を抱き、ウェブサイト上でもホロコーストそのものを否定し、ユダヤ人を「西欧文明の破壊者」と激しく非難していました。私たちは、いかなる歴史観や価値観をもつにせよ、事実を事実として受け止める誠実な態度を貫かねばなりません。国際平和ミュージアムは、「過去と誠実に向き合うこと」を基本的な展示原理とし、日本の被害だけでなく、日本軍が行なった加害についても歴史学の研究の成果に立って展示しています。

私たちは、今回の事件について、以下の2つの点に対する注意を喚起します。

（1）異なる価値観や歴史観をもつ他者を暴力で抹殺することは絶対に正当化されないこと。
（2）命の大切さを考える場であるべき「ホロコースト記念博物館」において、有無を言わさず命を奪うような暴虐が行われることは絶対に許されてはならないこと。

私たちは、国際平和ミュージアムが、今後とも命のかけがえのなさを訴えかける平和教育の場として機能するよう努力するとともに、資料の保存や調査研究の充実に努めるつもりです。

その後の報道でも、この事件はアメリカ社会に沈潜する暗く深い差別意識を背景にしていることが指摘されています。オバマ大統領が登場した後、コネティカット州の大学でユダヤ人学生がまさにユダヤ人であるという理由で射殺されたり、ニューヨーク市でユダヤ教の施設の爆破未遂事件が起こったり、人種や出身地や民族を理由に少数派を攻撃する“hate crime”（憎悪犯罪）が目立ちつつあるというのです。2007年の憎悪犯罪件数は7,624件に上りましたが、黒人を対象とした犯罪が2,658件(35%)、ユダヤ人を対象とした犯罪が969件(13%)もあったと伝えられています。この黒人警備員射殺事件の犯人は、車の中に、「オバマはユダヤ人によってつくられた。オバマはユダヤ人に言われた通りに動いているだけだ」と書いたメモを残していたとも伝えられており、アメリカが、オバマ大統領の政策次元の問題としてではなく、社会全体としてこうした暴力にどのように対処し得るか、今後の展開が注目されます。

ひめゆり平和祈念資料館へのエール

同じ頃、私は沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」に「開館20周年に寄せて」というエッセイを依頼されていました。私は、要旨以下のような文を寄せました。

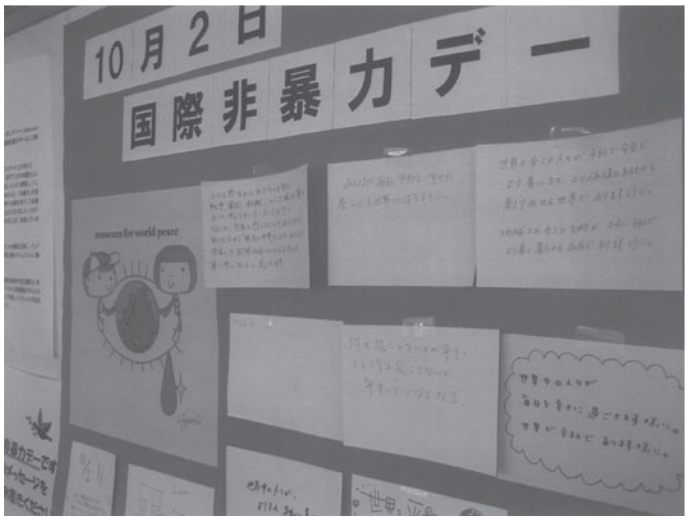
ひめゆり平和祈念資料館は、太平洋戦争の末期、本土防衛のための捨石作戦の中で、沖縄師範女子部と県立第一高女の教師や学徒たちが体験した悲劇を、展示や証言活動によって語り継いできた社会教育施設である。資料館は、単に「ひめゆり学徒隊」の悲劇を記録しているだけでなく、根こそぎ動員によって一二万県民を犠牲にした戦時政策の恐ろしさ、とりわけ戦時教育の恐ろしさを深く認識している。一九八九年に開設された時すでに「戦争を知らない世代が人口の過半数を超えていること」や「紛争がいまだに絶えないこと」をふまえて、「一人ひとりの恐ろしい戦争体験を語り継いでいく必要がある」との姿勢を表明していたが、二〇年後の今、戦争を知らない世代が国民の圧倒的多数を占めるに至り、隣国のミサイル打ち上げや核実験を前に「日本も軍事的備えを」と考える若者が増えていることを考えれば、ひめゆり平和祈念資料館が果たすべき役割は、色あせるどころか、ますますその必要性を増していると言わなければならない。

私は、これらの声明やメッセージやエッセイを通じて、ある共通のことを言おうとしていたように思います。それは、人間が、あの悲惨極まりない戦争や大量殺戮の果てにたどり着いた非戦・非差別の思想が、旧態依然たる差別思想の担い手たちの執拗な策動や、戦争を知らない世代の「目には目を」的な短絡的・好戦的な言説によって危機に瀕しているように見えることです。

私たちは、国の内外で平和の問題についてのさまざまな研究・協力の努力を積み重ね、いろいろな方法で平和運動にも取り組んできました。そうした努力の効果は直接的には見えにくいものですが、例えば、広島・長崎の被爆の実相を世界中に伝えることを通じて、核兵器の実戦使用を阻むために貢献してきましたし、飢餓や貧困や人権抑圧の実態を明らかにすることを通じて、国境を越えて人々が手を結ぶ条件も切り拓いてきました。何よりも、戦争や差別が人間にどれほど深い悲しみをもたらし、多くの人々を不幸にするばかりでなく、暴力の行使が終わった後も何十年にも渡ってどれほど大きな不信感を残すものかを解明することを通じて、戦争や差別をなくそうとする声を育むことに貢献してきました。

しかし、こうした活動を手控えたり、停滞させたりすれば、いつでも差別的思想をもつ人々の息を吹き返させ、悲惨な戦争体験をもたない若者たちを、「やられたらやり返せ」流の短絡的な考えに傾けさせかねません。

私たちは、迂遠（うえん）なように見えても、社会教育施設としての平和博物館の役割を愚直に、しかし、より魅力ある形で果たしていくことが求められるでしょう。頑張らなくちゃ！



毎年10月2日は国際非暴力デー
（カンディの生誕日）

国家･民族、自立と共存の愛国心

立命館大学国際平和ミュージアム
館長　高 杉 巴 彦

国家・民族の対立と融和

2008年10月に京都と広島で第6回国際平和博物館会議が開催され、世界から平和博物館や平和学の専門家が300人、市民・学生を含め5日間で延べ5,000人が参加し、協議内容や国際ネットワークの進展など歴史的成功をおさめました。私が述べた開会挨拶中に次の一節があります。

「歴史を振り返ると、かつて国民国家形成以来、国家と民族の関係が顕在化し、とりわけ二つの世界大戦を経て、民族自立・民族自決が基本的原則となり、われわれ人類は、歴史と民族を尊重することを学びました。しかし、地域紛争は今なお絶えることなく、人々が願った世界の平和は21世紀の今も、実現されていません。現在、地球のあらゆる国や地域の経済・政治が連関し、物資や資金さらに人材までも流動し、互いに影響し合う時代となっています。しかし一方では民族主義や国家主義が対立し合い、宗教や風俗・習慣、それぞれの文化の多様性が、その輝きを持って有効に融和と共生に向かわず、互いに自分たちの正義を主張しあう排外主義的状況も生み出されています。（中略）こうした人類的諸課題を解決し、『構造的暴力』の要因をなくし、国家・地域・民族が相互に発展と繁栄をもたらす『持続可能な平和』を創出し、人間の可能性を豊かに発展させるための行動が求められています。」

この中の国家や民族などに関する部分は、英文では次のように訳されました。── 国民国家：nations states, 国家と民族の関係：the relationship between nations and their populations, 民族自立・民族自決の原則：the principal of the self-determination and the national independence, 歴史と民族の尊敬：respect history and nations, 民族主義や国家主義が対立し合い：ethno-national conflicts──私たちは日本語で国家、民族などを使い分けることをしますが、nationの訳を辞書で引くと、国民；国家，民族国家；民族；〔the～s〕《詩》全人類,世界諸国民；部族(連合)；the voice of the nation国民の声、世論、the Western nations西洋諸国、a nation without a country国をもたない民族、〔研究社　リーダーズ英和辞典第2版〕とあります。

ナショナリズムと愛国心

つまりnationは国家であり、国民であり、民族でもあるわけです。ヨーロッパにおいて王朝制から近代国家に移行する段階で、統合国家としての国民国家、とりわけ産業革命以降の強大な軍事力を持った国民国家（nations states）が出来上がっていく時に、これをまとめていく共同体的一体意識としてnationが意識され、ナショナリズムや愛国心が形成されていったことによるものです。

したがって、それは民族の独自性や一体性を創出し強調していく作業と、それを学校教育などによって社会化していく方向性とを持つことになります。日本でも明治国家の成立にともない、家父長的家族主義による「家族国家論」や、国家神道による「万世一系」とした「天皇制」の創出と擬制的「単一民族国家論」を展開し、一方で「教育勅語」「国定教科書」制定で、「国体」を絶対的存在として学校教育で強化し「連帯感」を創り、その意識は日本人の一部に今日なお引きずっています。

民族自決と排外主義

ナショナリズムがまずは国民統合のための国家主義として現れた一方、20世紀、大国の支配下にある民族からの「民族自決」権を求める動きが顕在化し、第1次世界大戦後のベルサイユ条約でヨーロッパについて原則化し、第2次世界大戦後にその動きは加速化し、国連憲章中に、植民地人民の自決権が盛り込まれました。現在旧植民地の多くが独立を達成しています。

しかし今度は国家内部における少数民族が、言語や宗教、風俗・習慣、文化の多様性を根拠に、主権国家からの自治や独立を求め、それを主権国家が押さえ込みにかかり、さらに別の大国が戦略上「民族」側を支援して、新たな対立と、互いに正義を主張しあう排外主義的状況も生まれています。例えば1990年代のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争における「民族浄化」によって、多数のクロアチア人やセルビア人双方が加害者であり被害者となる状況や、2008年のグルジアにおける南オセチア独立要求への軍隊派遣と、対抗してのロシアの侵攻と独立承認というような、国家内の民

族対立と重層的な国家間対立の構図が生まれています。チベットやウィグル自治区などと中国国家との間の抵抗と圧力など、ナショナリズムと愛国心の排外主義的な事態も生まれています。

郷土愛と愛国心

こうした状況を見てくると、「わが郷土」や「故郷」を愛する気持ちが「愛国心」につながり、さらに人類愛に結びつくなどとはとてもいえない状況が良くわかります。この点ではとりわけ日本人の場合、郷土愛と愛国心を区別せず連動するものと捉えがちです。しかし例えば沖縄の場合、歴史的には琉球王国であったものが、薩摩藩の支配を経て、明治期での「琉球処分」で日本国家に所属させられ、それでいて、沖縄戦で日本本土の犠牲となり、さらにはサンフランシスコ条約でアメリカの施政権下におかれ、現在も基地問題に揺れています。ここでは、単純に「郷土愛」が日本国への愛と直結するわけには行かない状況があります。

文化論からのナショナリズム

一方で、かつての植民地国での反日的「愛国教育」などや日本政府の戦後解決の不徹底さからくる対日感情に、「いつまで言うのか」というレベルでの若者間でのプチナショナリズムの現れが日本でおこっています。また北朝鮮による拉致問題や核実験あるいは世界的金融危機に際しての、日本の国益擁護という形や、イラク戦争等での日本の「国際的評価」という形でのナショナリズムがあり、保守勢力の中でも親米層と反米層が別れてくるようになってきています。

もちろん「教育基本法」の改訂や「新しい歴史教科書」の動きなど、学校教育を通じてナショナリズムを形成する動きはしばしば問題になりますが、全体には排外的ナショナリズムの傾向は、各種メディアを媒体として、上からとばかりはいえない現象によって進行しています。特に1980年代からTVやマンガ、インターネット情報、ビジネス雑誌、情報誌など、マスメディアのみならずサブカルチュア文化情報によって、日本が国際社会の中で直面している事態が政治・経済の現象として取り出され、また文化交流や「文化輸出」現象として日本が紹介されてきました。その中で「国益」「日本国民の立場」などが強調されるとともに、日本文化の「特徴・特異性」や日本文化の「再評価」などが際立っています。もちろん、西洋的「原理主義」に対してアジア的・日本的な文化的「融合主義」が持つ積極的意義を、平和な国際社会の創造に活かすことは大切です。しかし上手に国際ビジネスを乗り切る手段としての「異文化対応マニュアル」や、「日本文化特異論」でわが国の優位性を誇る、言いっぱなしの文化論などが生み出す新たなナショナリズムは、「消費社会における文化ナショナリズム」としてすでに吉野耕作氏が指摘しているところです（『文化ナショナリズムの社会学』）。

多様性の中の自立と融合

私たちは、平和な地球社会を創り出していく「和解と共生」の道筋を探求し創造するためには、自国で当たり前と考えていた価値観や歴史認識とは異なり、平和への思いは共通でも、その具現化のための考え方や方法が違う人々が、その相違を理解しあい、自らの価値観や認識の再構築を行う姿勢を持って、自立的に学び行動することが肝要と考えます。したがって「愛国心」も多様な文化の各々を愛するとともに、異質性・多様性の尊重と共存によって、自国への愛から「愛地球心」へと深化させていくことが望まれます。国内の多文化認識を持つ国にあっては、このような「愛国心」認識を持ちやすいはずですが、それが現実には先述のようにさらに小民族間の排外主義に陥ったりしています。他方、日本のように雑種文化ではあるが文化の同質化が進んでいると、異質な文化を含めた「愛国心」を形成するためには、国際摩擦の中で日本文化を世界文化の中に共存させていく努力が必要となるわけです。この点では、EU諸国が「多様性の中の統一」を掲げている試みを、もっと研究することも大切と思われます。

「国家」が存在し国家間の力と折衝によって世界が動いている現段階で、狭い「愛国心」でまとまるのではなく、国家を超越するコスモポリタニズムに飛ぶのでもなく、自立した文化と価値観が共存しさらに再構築しあう関係、「多様化の中の自立と融合」の「愛国心」に習熟することが各国民に求められており、その面でこそリーダーシップを発揮する政治家が期待されているといえるでしょう。

第6回国際平和博物館会議　開会挨拶の様子

開催報告
（2009年4月～7月）

今号では2009年４月から7月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第45回 発掘された京都の武器2
ー第16師団が埋めた武器ー

会期　2009年４月１日（水）～４月17日（金）

2007年１月のミニ企画展示「知らなかった京都の戦争」（第12回）で実施した京都市内の小学校の校庭から出土した武器展示に引き続き、今展では、2008年から2009年にかけて行われた第16師団跡地での発掘調査であきらかになった成果を、速報展示しました。

小学校跡地では終戦直後、進駐軍の手に渡るのを逃れるため教練用の武器が曲げて捨てられていましたが、軍隊も同様に武器の廃棄を行っていたこと、小学校の武器廃棄は民間人が独自に行ったものではなく師団と関連していた可能性があることが分りました。

本展では、前回の出土状況と比較しながら、今回実際に出土した軽機関銃や火炎放射器などの生々しい資料を展示し、これまで明るみに出なかった歴史の事実を提示しました。

師団跡地から発掘された武器

第46回 No war No base
観光では見ることができない沖縄･韓国

会期　2009年４月25日（土）～５月17日（日）

昨年度の「『安全保障』と女性の権利ー沖縄の過去と現在から学ぶ」（第34回）の展示に引き続き、女性の人権を考えるWILPF Rits（WILPFとは、婦人国際平和自由連盟の略。WILPF Ritsは、2007年に立命館大学生が設立したものです。）が、沖縄スタディ・ツアーを通して学んだ、本土からは見えにくい沖縄の米軍地問題について紹介をしました。今展では、沖縄に米軍基地が建設された歴史、米軍のリクルート制度、米兵による性暴力、環境汚染、基地と経済・雇用など、米軍基地があることによって生じるさまざまな問題や米軍基地と隣合わせの生活を送る沖縄の人々の思いを紹介しました。

第47回 友禅図案（絵摺り）に描かれた「韓国併合」

会期　2009年５月23日（土）～６月21日（日）

図案とは、友禅染や着物柄の設計図にあたるものです。図案は専門の絵師や画家たちによって描かれ、それをもとに専門の型彫り職人が型を彫りました。絵摺りはその型から作られた試し摺りのことです。伝統工芸と戦争は、一見関係がないように見えますが、さまざまな戦争柄の着物が数多く作られていました。今展では、1910年前後に製作された、「韓国併合」に関わる友禅染の絵摺りを６点展示しました。韓国の地名がハングル文字で様々な角度で描き込まれた絵柄、朝鮮半島の地図と地名が描かれたもの、中には日本列島と朝鮮半島の地図を背景に、韓国併合の年代数字を音符になぞらえ五線譜に配した粋な図案もみられます。また、図案を生地に仕立てた羽裏（羽織の裏地）や、袱紗などの資料も展示。韓国併合当時の社会状況をうかがうと共に戦争時代にあった伝統工芸の役割の一面を紹介しました。

友禅図案の展示の様子

第48回 経帷子（きょうかたびら）の織人
ローズマリー・コーツィー展

会期　2009年６月27日（土）～７月26日（日）

コーツィーは、1939年にユダヤ人の両親のもと、ドイツに生まれました。ナチのユダヤ人等への絶滅政策のために1942年に母親とともに強制収容所に入れられました。その後フランスの収容所に一人で移送され、四歳から六歳の間、「死」と隣り合わせの過酷な労働環境におかれました。解放後も、家族の離散や孤児院での厳しい生活が待っており心身の調子を崩しましたが、この頃、修道女から水彩画の手ほどきを受け、やがてジュネーブの装飾美術学校に進み、繊維造形の気鋭作家として成功を収めました。一方生涯に渡り、脳裏から片時も離れることのないナチ収容所の様子を描き続け、犠牲者たちの死を悼みました。

生涯で一万数千点にものぼるドローイングには、「わたしはあなたに経帷子（きょうかたびら）を織ってあげる」という言葉が記されています（＊経帷子（きょうかたびら）とは死装束の意味）。幼少期の悲惨な体験を源泉とした繊細な描線によって紡がれた彼女の作品は、見る者の心に鋭く深く突き刺さります。今展では、ローズマリー・コーツィーが描いたインク・ドローイングやパステル画25点の他、コーツィーの手記を展示しました。

ベトナム戦争とアジアの未来
ー「民衆主義」と「女性力」ー

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長　桂　　良太郎
（立命館大学国際関係学部教授）

1. なぜいま「ベトナム戦争」再考なのか

ベトナム戦争は第二次世界大戦後、最大の戦争となりました。300万人をくだらないアメリカ兵がベトナム戦争に直接かかわったと考えてよいでしょう。この戦争で5万8000名以上のアメリカ兵が死亡しましたが、ベトナム側の戦争での死者は百数十万人あるいは200万人以上などと言われています。民間人の死者がいかに莫大であったかが想像されます。あのソンミ村でのアメリカ師団の第一大隊キャリー中隊は、約450名～500名の住民を殺害しました。その大半は女性や子どもでした。米兵たちによるベトナム民衆への残虐行為は、改めて戦争の愚かさを私たちに教えてくれています。

しかし私たち日本もかつて多くのベトナム民衆を第二次世界大戦時に苦しめ、200万人もの人々を餓死させてきたことも忘れてはなりません。

戦争ほど人間を不幸にするものがないということを改めてこの「ベトナム戦争のコーナー」から学びなおしてみましょう。

2.「ベトナム戦争」と「民衆主義」

北爆にたちむかう兵士の写真がこのコーナーにあります。ベトナム戦争を特徴づける民衆像は、鍬や鋤を持つ農民たちが、そのままゲリラ兵になったことです。彼らは田畑で農作業を毎日していますが、ひとたびアメリカ軍の航空機が頭上に飛来して爆撃を始めると、やおら銃を取り上げ米軍機に銃口を定めたのでした。

私がアジア研究をはじめたきっかけは、この民衆たちの家族や故郷の土地に対する思いが国家と国家の闘争のなかでもしっかり根付き、祖先から受け継いだ伝統文化を保持しようとするエンパワーメントに関心をもったからです。いわゆる欧米の「民主主義」とは異なった、「民衆主義」と筆者は名づけていますが、先祖代々培われた土地を基盤とした親族や家族の絆としての自分たちのアイデンティティーを打ち壊そうとする外敵に対して、断固として自分たちの民族としての誇りを捨てることなく外敵にたちむかったのです。このコーナーの写真の中に、ベトナム民衆の底力をしっかりと見ていただきたいものです。

3. ベトナム戦争を支えた「女性たちの力」

筆者がベトナム研究をつうじて学んだことは、アジアの、とりわけベトナムの女性たちの戦争時の働きのすごさです。代表的な例としては、グエン・ティ・デインという女性は、後に解放戦線の武装勢力の中核であり、正規軍である南ベトナム解放軍の副司令官までなった女性ですが、彼女はソ連などに留学した軍事学校出のエリートでもなく、あくまでメコン・デルタにこだわり続けた、ゲリラ生え抜きの女戦士であり、南ベトナム武装勢力の最高司令官の一人でした。なぜそこまで彼女を女戦士にしたかは、直接的には爆撃等で兄弟姉妹が傷つき、殺害されたことがきっかけですが、それよりも彼女自身をふくめ、自分たちの家族や先祖代々の土地を守るために必死に生きようとした、まさしく「民衆主義」の理念と目標が、彼女はもとより、多くの女性たちのこころを奮い立たせたのでありましょう。メコン・デルタの彼女たちは、いつも軍服姿ではなく、農民婦人の普段着で登場し、しかも常に彼女たちの襟元には嚆矢模様のスカーフが巻かれています。そのスカーフは一般にカンザン(Khan ran)と呼ばれ、ベトナム南部の女性たちがごく普通に身につけているものです。筆者がそのカンザンについてベトナム戦争証跡博物館のヴァン(Van)館長に尋ねると、彼女は、カンザンは戦場における非常時の心備えを象徴するといった大げさなものではなく、日常性の発露としてのさりげない「おしゃれ」、たとえば薄暗いジャングルに一輪の花を添えたいとする気心だ、と答えてくれました。そのスカーフは、また、赤子を夜露から守ったり、愛する男性の首に結んであげたりしたものです、とのことでした。

4. ベトナム戦争とアジアの未来

いまベトナムはドイモイ政策後、急速な社会変化にさらされています。社会学を学ぶ一人として、この国の将来を予測することは非常に困難です。この社会の変貌ぶりに毎回の訪越時に驚かされています。しかし、一つ言えることは、この国の女性たちの家族を守り、親戚や友人またはふるさとの人々との人間的な絆を大切にしようとする、いわゆるここで筆者が述べた「民衆主義」なるものは、ベトナム国民のこころの底にながれつづけていくであろうということです。

そしていつの時代にも、グエン･ティ･デインのような女性があらわれ、男性やうそで固められた政治権力や構造的暴力に対して、鉄槌を下すように思います。ジェンダーの問題をはじめ、環境破壊や家族崩壊を女性たちは敏感に感じとり、社会主義であろうがドイモイによる資本主義であろうが、そうした体制をこえて、平和と福祉にめざめた多くの女性たちが未来のベトナムを形成していくことでしょう。アジアの未来は女性たちのうごきにあると筆者は感じています。

博物館からの情報提供に求められるもの

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　八 村 広 三 郎
（立命館大学情報理工学部教授）

個人的な話で恐縮であるが、私にとって、博物館は因縁浅からぬものがある。電気工学系の大学院博士課程で学んだ後、研究者として最初に就職したのが、大阪・千里の国立民族学博物館の研究部であった。人文科学系の博物館としては当時大変珍しく、資料整理と研究のための大型コンピュータと、画像処理、音響処理などの最新のサブシステムを導入することになった。ここで助手としての職を得て、民族標本資料の形状や文様の画像解析、人工衛星画像による植生分布解析などの研究を行った。

ここでの経験は4年という短いものであったが、その後の私の研究者としての方向性を決めたといっても過言ではない。理系人間の私にとって、異文化に対する包容力と広い視野をもった個性豊かな民族学者たちとの出会いは、大変刺激的なものであった。また、人文科学と情報技術の連携という貴重な体験をすることができたのは幸せなことであった。その後、多少の曲折を経て1994年に本学理工学部に着任したが、現在も、アート・リサーチセンターを拠点として、文学部を中心とする人文系の先生方との研究活動に参加させていただいている。

さて、人文科学と情報処理技術の連携は、日本では「人文科学とコンピュータ」、欧米では “Humanities Computing” などという名称で活動が行われてきた。ところが、21世紀に入って、「デジタル・ヒューマニティーズ（以下、DH）」という言葉が、欧米で突然出現し、急速に学会や大学のコースなどの名称に使われるようになってきた。日本ではこの名称はまだ一般化していないが、私たちアート・リサーチセンターを活動拠点とする研究グループでは、いち早くこれに着目し、「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ研究拠点」というグローバルＣＯＥプログラム（GCOE）を実施している。

現在の情報技術の大きな位置を占めるのが、ネット、すなわちWebである。インターネットが生まれたのはそれほど昔のことではないが、その進歩は目覚ましく、Web上には実にさまざまな情報があふれ、われわれはこれらに、日常生活、ビジネス、研究の場面で、シームレスにアクセスすることができるようになった。人文科学においても、PCとWebという情報インフラによって、膨大な情報を手軽に扱う手段を手にしたのである。

もちろん、以前から、情報中心の研究活動は広く行われてきたが、グループや機関において閉じたものが中心であり、一般利用者がこれに参加するというものではなかった。現在のDHの潮流は、簡単に言えば、Webをベースとして、学術情報をより積極的に公開・発信・流通・活用しようというものである。

今では、Webによって、世界中の多くの大学や研究所、また博物館・美術館や資料館などの所有する情報を結びつけ、横断的に検索ができる。さらに、Webの利用環境はここ数年で質的な変化をとげ、初期の「見る」だけのWebから「使う」ためのWebへと変化してきている。近年よく見聞する「Web2.0」がこれを象徴している。

Web2.0では、情報提供サイトが提供する情報を利用するというそれまでの形態から、ブログに代表されるような、利用者が自ら情報を作成し公開・提供するというスタイルへの変化を示している。さらに、Wikipedia などの利用者参加型メディアの隆盛、さらに、YouTubeや Flickerなどを通じて、画像や動画に関しても一般利用者が簡単に情報の公開ができる。これらの機能は、Webを趣味や娯楽の対象としてとらえる人達によって急速に普及したのは事実だが、また一方で、人文社会科学の研究者からも着目されるようになった。彼らの所有する情報の公開と、それに基づくWeb上での議論、コメントや批判を得ることによる研究の深化など、多くの意義を見出すことができる。

このようなDHの流れは、入口から出口までの、研究にかかわる情報を広く公開することにより研究を促進し、またグローバルな立場から研究成果を問うなど、多くの利点を示すことになる。すでに、多くの大学・研究機関が、それぞれの研究成果をリポジトリとして公開し、博物館や資料館では貴重文献をデジタルライブラリとして、また、研究資料をアーカイブとして公開している。出口についても、新しく発表される学術論文は現在ではオンラインジャーナルとして刊行されるのが一般化してきており、これらはまた、即座に、次の新しい研究のための入口ともなる。さらに、研究途上の情報についても、上述したように、利用者（研

究者）の自らの手によりネット上に展開し、議論を深めることができる。

さて、先ごろ（09年6月）、DH分野の主たる国際会議であるDigital Humanities 2009（http://www.mith2.umd.edu/dh09/）が、米国メリーランド大学のMITH（Maryland Institute for Technologies in the Humanities, http://mith.umd.edu/）で開催され、これに参加する機会を得、また、このMITHの所長とはDHの今後の展開について議論をすることができた。さらに、これに引きつづき、メリーランド大学からはそう遠くないバージニア州 Fairfaxにある、ジョージ・メイソン大学Center for History and Newmedia（C-HNM：http://chnm.gmu.edu/）でTHATCamp（The Humanities and Technology Camp）という合宿形式の集会が行われ、これにも参加の機会を得た。

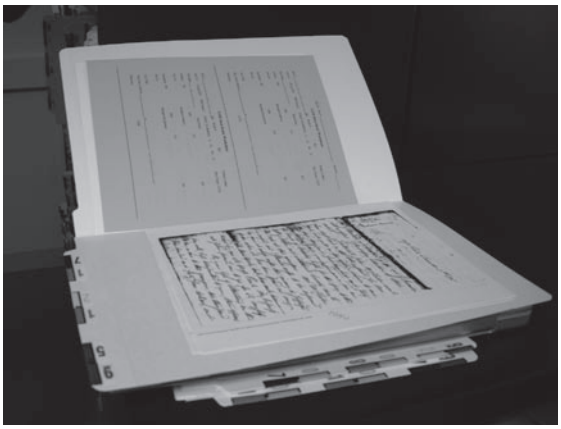
CHNMでは、Digital Historyという、デジタル化した資料（史料）に基づく歴史研究と教育の体系が運用されているが、その一環として、米国戦争局における18世紀以前の資料をデジタル化し、Webで公開するプロジェクトを実行中である。戦争局（1784年設置）の建物は、1800年に火災にあい、それまでの資料の全てを焼失してしまった。これの復元は長らくの悲願であったが、資料の多くのものが、米国内外の機関に残っていることがわかり、GMUではこれらのコピーを集め、デジタル化に着手した。現在55,000の資料が復元されているが、資料の大部分は兵站に関するものが多く、各部署でどれくらいの資材を当時調達していたのかがわかるという。（http://wardepartmentpapers.org/index.php）

さて、これらの研究集会をホストした大学の研究センターの活動もわれわれの目には大変興味深いものであったが、このような会議での研究者による発表内容および議論の様子が、また刺激的なものであった。議論の様子は、参加者の手によって、即座に、Web上のブログや、Twitterと呼ばれるカジュアルなメッセージ交換システムにアップされ、リアルタイムでWeb上での議論が展開されるのを目の当たりにして、人文科学の研究はここまで変わったかと驚かざるをえなかった。

人文・社会科学研究において、研究資料を保管し提供する、博物館・美術館（Museum）、図書館（Library）、公文書館（Archives）の果たす役割は大きい。これらはそれぞれが保有する資料類の固有の性質に基づいて、独自の資料管理や公開の方法がとられてきている。それぞれをネットから利用することが可能であったとしても、これらを横断的に利用することは困難であった。Webを基礎とした新しい研究基盤の確立のためには、これらの連携が必須であるとの認識から、近年MLA連携という言葉をよく聞くようになってきた。具体的にはそれぞれの提供するデータベースの横断的検索を可能にするための、検索ポータルや検索用メタデータの整備などである。DHの観点からも、これらは強く実現の求められるものである。

さて、大学において、国際平和ミュージアムのような博物館を持つことの意義は何か。教育機関として、その所有する資料類をさまざまな視点での教育に利用することを重視する必要がある。すでに、本ミュージアムでは学内における平和教育でさまざまな活動と支援を行ってきている。このような、パッケージ化された教育プログラム・情報提供も当然重要な機能の一つである。

一方、このようないわばお仕着せの情報提供ではなく、学生や利用者に自主的に考えさせる教育を目指すことも重要である。現物資料の展示は当然のこととし、戦争と平和という複雑に絡み合った事態や事象を考える上では、さまざまな形でネット上に提供されている情報を統一的に検索・集約し整理して、「総合的に、かつ、複眼的に考える」ことができるような情報提供手段を構築することが必要なのではないだろうか。すなわち、「資料を手繰り寄せ」「関連を見つけ」「考える」ことを支援する情報提供の仕組みである。これらは１つの博物館だけでは実現できないことである。国内にかぎらず、世界的に広がりつつある、ＭＬＡ連携による歴史資料等の相互利用が可能になる仕組みを考え、実現する必要がある。



ジョージメイソン大学 CHNM における米国戦争局資料

『新版　雑兵たちの戦場：中世の傭兵と奴隷狩り』

藤木久志著

（2005年6月10日　朝日新聞出版刊）

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長　**小 関 素 明**
（立命館大学文学部教授）

平和とは何か。平和博物館の中でもしばしば議論になる難問です。誰でもすぐに思い浮かぶのは、「戦争のない状態」「戦禍に巻き込まれない状態」という答えでしょう。もちろんこれに対しては「～の無い状態」ということだけでしか平和を意味づけられないのは問題ではないかという反論が存在するでしょう。

この点に関連して意にとめる必要があるのは、近年、戦禍、戦闘の凄惨さ、戦闘への従事を不本意に強要されることの悲惨さをリアルに想像できていないのではないかと思わざるを得ない局面に遭遇する機会がとみに多く、もはや平和への執着が根をはるべき土壌自体が流失しつつあるのではないかという暗澹とした思いにとらわれることが間々あるということです。手近な例で言えば、授業で京都第十六師団の駐屯問題をテーマに採りあげた学生が「京都第十六師団は南京で大活躍したんですよぉ～」と朗らかに報告し、周りも特段問題を感じていないような事態です。この学生は南京大虐殺を知らなかったわけでも、挑戦的意図を持って南京大虐殺を「大活躍」と置き換えたのでもありません。問題は、南京大虐殺という事実を一応知りながら、虐殺という行為がどういうことかリアルに想像できていないがゆえに、それを含めた軍事行動を何のわだかまりもなく「大活躍」と総括したという点にあります。つまりこの学生にとっては南京大虐殺は単なる「情報」としての意味しか持っていないと言うことです。考えようによってはこれは反動勢力の攻勢以上にやっかいで憂うべき事態です。

こうした事態に目を覆うことができなくなったいま、私が若い人たちに勧めたい一冊の本があります。それが今から紹介する藤木久志著『新版　雑兵たちの戦場』（2005年　朝日選書）です。この本が対象とする時代は近代ではなく、大河ドラマなどでも人気の戦国時代と呼ばれる時代です。記されていることは、戦国時代の戦場においては一般から徴発された雑兵（ぞうひょう）と呼ばれる足軽兵が乱暴狼藉を繰り広げていたという凄惨な状況です。そうした行為は俗に「乱取り」と呼ばれる略奪行為で、戦禍にさらされた村々においては、奴隷狩りとも言うべき人さらいや、富の略奪行為がなかば黙認されていました。なぜなら戦闘への従事に見合う恩賞が保障されていなかった雑兵にとっては御恩も奉公も武士道も関係なく、そうした戦場からの「戦利品」が生きていく上での大きな糧ともなっていたからです。当然さらわれてきた奴隷たち（子供も多かった）は、貴重な労働力として酷使されたに相違ありません。こうした略奪行為は国内の戦闘においてだけでなく、周知の豊臣秀吉の朝鮮出兵の際にも横行しました。

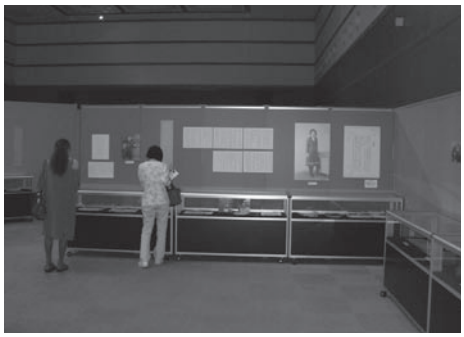
現在に生きる人々は戦国時代と言えば、ドラマの影響もあってか、戦国武将たちの夢とロマンに満ちた時代のように思いがちですが、その時代の戦闘は決して「国盗り物語」をもって語れるような夢とロマンに満ちたものではなく、生存のための熾烈な争奪が横行する凄惨な場に他なりませんでした。現在でも人気のある上杉謙信の度重なる関東出兵は義挙でも逆に暴挙でもなく、農閑期に於ける「口減らし」対策であるとともに他領での略奪を織り込んだ「大ベンチャー・ビジネス」であり、さらには武田信玄が自領で人気があったのは「勝ち続ける戦場の乱取りのお陰で甲斐の暮らしはいつも豊かだった」からだとすれば、生存することさえ他を侵犯しなければ困難であった戦国時代の過酷さを思い起こさずにはいられません。

こうした過酷な状況につねに直面していたからこそ、民衆たちは逞しく、したたかに戦闘の惨禍からのがれる術を編み出していったことにも本書はふれています。戦闘とは無秩序がはびこる凄惨な行為であり、また平和とはそうした状況から逃れるための逞しい努力の所産であることが本書を読めばよく分かります。戦闘も凄惨ですが、戦闘を避け平和を守ることにも熾烈な努力が求められます。これは何も戦国時代にかぎった話ではありません。

現在においても必要なそうしたエネルギーは本書が明らかにしているような歴史の現実を直視し、その衝撃を記憶にとどめることによって必ずしも自分が実際に見ていないことにも想像力を及ぼす力を養う以外に維持することは絶対に不可能です。本書にふれることを機会に、少しでも多くの方々がこの点の重要性に思いをはせてくださることを願ってやみません。

岡部伊都子回顧展

会　期：2009年４月28日(火)～５月31日(日)
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
参観者：3,954名
後　援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、
京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、
KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、
読売新聞大阪本社
協　力：株式会社 藤原書店


展示会場の様子

関連イベント　オープニング式典

日　時：４月28日(火)　９時30分～10時
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム１階ロビー
参加者：49名

オープニング式典の様子

記念講演会「岡部伊都子を語る」

日　時：2009年5月16日（土）13：30～15：00
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム1階ロビー
講　師：窪島誠一郎（無言館館主）
池田良則（洋画家）
尾形明子（文芸評論家）
コーディネーター：高杉巴彦（国際平和ミュージアム館長）
聴講者：261名

記念講演会の様子

女流随筆家、岡部伊都子さんは、花鳥風月や衣食住から、美術・自然・戦争・沖縄・差別・環境とさまざまな分野を通じて、平和を願い、人間性を追求する発言を貫きました。多くの著名人に愛読され、生涯で100冊を越える著作を残しています。「経歴より病歴」と自称する生前の岡部伊都子さんを知る人々は、「あんな小さな体のどこから、あれほどのエネルギーが出ていたのか」と、賞賛を惜しみません。常に時世を真摯に見つめつつ、岡部さんは、2008年４月29日に85歳の生涯を閉じました。国際平和ミュージアムでは、2005年度から２階常設展で開設している「無言館」京都館にて、岡部さんの著作の原点となる、戦死した兄・岡部博さんや「隣のお兄ちゃん」である瀧川鐸三さんの、思い出の文箱を展示しています。そのご縁もあり、岡部さんの一周忌にあたるこの時期に、岡部伊都子回顧展をミュージアムにおいて開催する運びとなりました。

婚約者を戦地に送り出した岡部さんは、自分を「加害の女」と呼び、戦後は平和への熱い思いを持ち続けました。岡部さんと沖縄との関わりは、婚約者の木村邦夫さんを沖縄戦で亡くしたことに始まります。出征前の木村さんは、「自分はこの戦争は間違っていると思う。天皇陛下のためになんか、死ぬのはいやだ。国のためとか、君のためなら、よろこんで死ぬけれども。」と率直な胸の裡を岡部さんに打ち明けましたが、岡部さんは突然のことに「わたしなら、よろこんで死ぬけれども」と答えます。この頃の岡部さんは周囲の少女と同じように「聖戦」を信じていたのです。1945（昭和20）年、幼い頃から好意を寄せていた木村さんは沖縄で戦死しました。戦争が終わり多くの経験を経て真実が見えてきた時、戦死した婚約者へのやるせない思いから、自分を「加害の女」と呼ぶことになり、以後の人間岡部伊都子を形成していくことになったのです。

本展覧会では、婚約者や兄の遺品など平和への原点となった資料とあわせ、少女時代の原稿や日記、アルバム、鏡台や箪笥・

琴などの調度品、書簡など、亡くなるまで手元に置いた品々を展示し、正義を愛し、平和を願い、美しい言葉で人間の大切な心を語った、岡部伊都子さんの世界を紹介しました。

4月28日（火）には、回顧展開催を記念して、特別展会場前のミュージアム1階ロビーでオープニング式典を行いました。式典では岡部伊都子さんのご遺族の岡部優里さんにご挨拶をたまわり、本展のためにご遺族から借用した岡部伊都子さんの関連資料の整理にあたった立命館大学文学研究科の楠井清文さんと池田啓悟さんに、資料整理に携わった感想を述べていただきました。

また、5月16日（土）に開催した記念講演会「岡部伊都子を語る」では、岡部さんと交流のあった、無言館館主の窪島誠一郎氏、文芸評論家の尾形明子氏、洋画家の池田良則氏をお招きし、それぞれの岡部像を語っていただきました。岡部さんとの出会いや、沖縄に対する岡部さんの思いを語っていただく中で、共通の人物像がうかび、岡部伊都子という人物は、身近な事象や風物、関わった人たちをとても大切にした女性だった、日本人としてのよき在り方を常に追求していた。小さな差別も許さず、言葉をおざなりにしない。常に社会に対し怒りを持っていて、他人のいたみを感じ取れる人だった、自分の身をけずりながら人をもてなし、言葉を絞り出していた、というものでした。窪島氏は講演の中で、「岡部さんは作家ではなく『随筆家』としての立位置にいた人だった。岡部伊都子文学に限ってはこのポジションが似合う。作り事ではない、自分の肉声を、生まれ育った風土のなかでしなやかな言葉で伝えた。岡部さんの言葉は出会ってきた人によって砥石のように磨かれ1本の鋼になった」と述べました。本展が、今後の岡部伊都子研究の皮切りとなり、より多くの方々に岡部伊都子文学を知っていただくよすがとなればと願います。

見学者の感想より

●私は、彼女を知らなかったのだが、彼女の生き様が、この展示会からありありと伝わり、彼女に興味を持った。彼女が幼少期から何を思い、何が彼女を変えたのか、彼女を形成した歴史に触れることができて、大変良かった。彼女も1人の人間で、いろいろなことから影響をうけて人に啓蒙を与える人間になったのであり、私自身にあてはめることは大変身勝手なことかもしれないが、私自身も日々経験すること全てが自分自身を形づくるのだと意識して、意味のある人生をおくりたいと思った。
（本学国際関係研究科1回生　20代　女性）

●当時のものがそのままの状態で展示されており文章などで感じるよりとても肌で感じられた。
（本学経済学部3回生　20代　男性）

●岡部さんの随筆は闘う姿勢にある。弱い者にはその支えになろうと寄りそわれる。理不尽な強者にはムチを振りただす。そして、ご自身のまちがいにも容しゃなく自己批判を加える。「加害の女」を克服するために静かに大きな声で戦争の醜い実相を粘り強く訴えてこられたことには驚嘆する。
（大阪府　50代　男性）

●相愛中学の時に岡部さんと会いました。それ以来のファンです。岡部さんの作文や「おむすびの言葉」を指導した寺西先生に私も国語を学び、いつしか国文学（国語学）の案内になり、大学で教えてきました。今は立命で非常勤で教えています。私の人生と重なって、胸あつくなりました。生活を展示しているので彼女の美意識がよく分かりました。弱い女性の強さをいろいろ感じました。平和ミュージアムが彼女を取りあげたことに感激し、感謝しています。平和思想は身近に訴えるものだと感じました。　（大阪府　60代　女性）

●20才の頃より、ずっと読み続けて来た岡部さんの全ての息づかいが聞こえてきそうで胸一杯になりました。講演会やサークルでのお話を、思い出しなつかしい気持でした。外国文学に没頭していた時代にも、ほっと岡部さんのエッセイに心和んだ時を思い出します。今後も又、この様な特別展を催して頂き度いと思います。　（京都市　60代　女性）

●ありがとうございました。真実を知らされず教育されたこと、本当のことを言えない言えなかった事実、歴史。本心を伝えて残した若者の姿を若者に心を寄せて生きられた岡部さんの姿、思想を暮らしの一つ一つをどうか末永く残していっていただきたいと存じます！岡部さんの美しさに感動しました。
（京都市　60代　女性）

●青春時代に、憧れと、恋と、彷徨、苦しみ、悩みの中、何と繊細な感性の文章に出会った事でしょう。こんな素敵な女性が居るのだと思いました。そして、今還暦を過ぎ、改めて、その時感動した、岡部伊都子氏に出会い青春がよみがえります。京都にお住いでした事を知り、お会いしたかったです。作家志望。　（京都市　60代　女性）

●こんな時代だからこそ、“岡部さんの言葉”の意味をあらためてかみしめる必要があると思います。直筆の日記や手紙など、心にひびくものを感じます。　（京都府　50代　女性）

●生き方を示してくれる最も尊敬する女性です。何度かお便り（ファンレター）を出させていただきました。その都度お返事をいただき、恐れ多いこととうれしく恥ずかしく思っています。私の宝物です。一字一字かみしめるような日本語の美しい文章。座右の本として大切に何冊かの本をひもとこうと思います。もっともっと多くの人に知ってもらいたい大切な人です。　（京都府　60代　女性）

講演会感想より

●着物が好きで着物写真の岡部さんをみて、ただそれだけで足を運ばせて戴きました。講演をきかせて戴いただけで、全くどんな人か知らなかったけれど、岡部さんと呼べるほど、とても親しみが持てました。岡部さんのようにとても愛らしく、ていねいに人生を生きたいなって思います。　（京都府　20代　女性）

●去年、亡くなった時はとても悲しく、「お別れ会」に参加させてもらい多くの人に愛されていたことを実感。去年参加したおかげで今日の案内も頂き、こうして又「岡部伊都子」さんを身近に感じると共に私も再度「岡部伊都子」の著書を読み、その生き方、権力におもねらない生き方を自分なりにまねしていきたい。今日の講演会の4方の皆様のとても楽しいお話を聞けて又「岡部伊都子」さんが身近に感じました。ありがとうございました。
（愛知県　50代　女性）

●今日又私にとって新しい岡部伊都子に出合いました。この出合いを味わいふくらましてこれから歩き新しい自分を生きたいと思います。　（京都市　60代　女性）

●岡部伊都子さんのしたたかさ、しなやかさがしみじみと伝わってきました。納得?できました!私の母と同世代を生き抜いた女性としてこれからもその作品と人とが語り伝えられますように!!
（京都府　60代　女性）

展示で紹介した岡部伊都子の言葉〈「清(ちゅ)らに生きる」(藤原書店)と「岡部伊都子集」(岩波書店)より抜粋〉15点のなかから好きな言葉を、来館者に選んでいただきました。

1位　49票
人間の愛とは、よりそうことだと思う。
一方が一方に近づくのではなく、双方からよりそうことだ。

2位　42票
「戦争はまちがっている。戦争で死にたくない。」
沖縄で自決したある若者の声であるが、過去の声ではない。
現在の声である。
そして、未来の声でもある。

3位　38票
「この戦争はまちがっている。」
邦夫さん、よくぞよくぞ、この言葉をのこしてくれはりました。
あのだいじなだいじな言葉がなかったら、わたしの生きている意味はあらしません。

4位　33票
自分は差別なんかしないと思っていた。
人を気の毒がることで、自分をいい気分にさせていた。
それこそが差別者の姿であるのに。

5位　21票
何気なく書く言葉、何気なく読む言葉のなかに、きらりと輝く真実。

6位　19票
若いころ、あんなに、「死」を見つめていた私が、
年を重ねたいま、逆に「生」を大切に生きている。

7位　16票
ブルドーザーで落とされる骨、アスファルトの下づめになった骨を考えると、まだ生きている私の骨が哭く。

8位　15票
暮らしの必需の品々は、心に叶う、手に合う、ていねいに創られた品々を。

9位　13票
いかに美化されようと「玉砕」思想はもういやだ。
われ、玉として砕けむよりも、瓦壊をおそれぬ瓦として生きたし。

9位　13票
いま生きて歩いているこの苦しい道以外に、花道なんてあるはずがない。

9位　13票
文字をつらねるということは、口に言うのとはまたちがった、一種の誓いである。

12位　11票
つらいけれども、辛さも喜びにする文化を創りたい。

13位　10票
「あなたが社会的な関心を持たれるのは、一種の業ですね」といった人があって、わたしは思いがけない業を発見した。
わたしが生かされてきたのは、むしろこの業の力なのだ。

14位　4票
私は、心を話してきた、心を書いてきた。

15位　2票
娘時代の私は、天に憧れ、美を崇敬した。
周囲の人々に大切にされ、またその人々にとって喜びでありうる自信をもっていた。

『アメリカばんざい　～crazy as usual』上映会

開 催 日：2009年7月4日（土）
時　　間：①13時～　②16時30分～
場　　所：立命館大学衣笠キャンパス　以学館２号ホール
参 観 者：204名
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：(株)如月社

《対　談》
時　　間：15時10分～16時10分
対　　談：藤本幸久氏(映画監督)
　　君島東彦氏(立命館大学国際関係学部教授)
参 加 者：80名

◎ 藤本監督（右）と君島教授。対談の様子

作品：『アメリカばんざい』[2008年／日本]

2003年よりはじまりましたこの映画上映会の企画では、2009年度前期、『アメリカばんざい』を上映しました。今回、関西地域で初上映ということもあり、新聞各紙にも記事掲載され、一般の方、本学学生も含め多くの方々に足を運んでいただきました。

この作品は、2005年「Marines Go Home～辺野古・梅香里・矢臼別」を完成させた藤本監督が、沖縄でであった米兵から感じた「彼らはどこから来たのか？なぜ兵士になりたいのか？そしてどこに行くのか？」という疑問を追い求め、2006年10月から2008年4月にかけ、計7回のべ200日間のアメリカ取材・撮影を重ね、この作品を完成させました。

対談では、藤本監督が映画監督になった経緯をご紹介いただきました。藤本監督は、現在北海道十勝の新得を拠点に活動しており、ドキュメンタリーの映画を作る仕事をすること15年。それまでは、三重県四日市の出身で、学生時代から水俣病に関する支援活動をしていたそうです。大学卒業後、一旦市役所職員として働き、その後、自分で楽しい仕事をしたい、と映画の世界へ入られたそうです。

次に藤本監督が、アメリカに初めて行って驚いたことについて語られました。それは、アメリカの森の中に沢山人が住んでいるということ。その多くが、ベトナムやアフガニスタン・イラクからの帰還兵であるということ。現在アメリカでは、350万人近くの人たちが、ホームレスで、その多くが退役軍人だということ。

戦争に行って病んだ人たちが、心の傷を負い、その多くはPTSDに苦しみ、アメリカの森の中にひっそり暮らしているというのです。人間らしさでの表れでもありますが、人は人を殺せないということ。もともと兵士を作るのには無理がある、と感じたことを熱く語りました。

憲法学者の君島先生からは、日本国憲法9条、25条にふれながら、25条の生存権が保障されなければ、9条の平和は守れないということ。アメリカでは、ベトナム戦争時は、徴兵制で、現在は、志願制であり、自己責任で軍隊に入隊するということ。結果として、貧困な層から入隊するという、まさに格差社会でないと、兵隊は集まらないということを、語っていただきました。

君島先生は、昨年アメリカに留学中、購読していた“ワシントンポスト”を例にだして、説明をされました。紙面では、2ヵ月毎に戦死した人の顔写真が掲載されており、その数4,000人以上。イラク戦争に遡れば、もっと戦死者の数は多いでしょう。戦死者の顔写真を掲載することは、戦死者を英雄視することであり、また悼むことです。しかし、どうもアメリカ人にその戦死者の写真を載せても、あまり自分自身の問題として考えていないように感じられる。つまり、今のアメリカの戦争は、志願制であり、中流層以上にとっては、他人事であり、自分たちは死ぬことはないのです。よって、人々にひびかないのでしょう。戦死する人々は、貧困な層の人たちなのだから。

最後に「アメリカの今は、日本の近未来なのか」「平和とはなにか」を今一度考える機会にしていただきたいと、君島先生から下記の4冊の書籍紹介があり、対談を締めくくられました。

『ルポ貧困大国アメリカ』　堤未果著（岩波新書、2008年）
『戦争における「人殺し」の心理学』デーヴ・グロスマン著（ちくま学芸文庫、2004年）
『「戦争」の心理学：人間における戦闘のメカニズム』デーヴ・グロスマン、ローレン・W・クリステンセン著（二見書房、2008年）
『文化と国防：戦後日本の警察と軍隊』／Peter J.カッツェンスタイン著（日本経済評論社、2007年）

映画上映の感想に寄せられたたくさんの声の中から幾つか紹介いたします。

【映画上映の感想より】

◆すごく衝撃的な内容でショックを受けました。大学の学費が払えないからやむを得ず入隊して、でもPTSDで悩んでいて人生を狂わせてしまう‥‥という負のサイクルに陥らざるを得ない私達と同年代のアメリカ人を見て、それを断たなければと強く感じました。本当に戦争はろくでもないものです。若者の未来や兵士だけでなく、敵とみなされ犠牲になってしまった子供達の未来も奪ってしまうのは許せないです。だからアメリカ人の若者への教育を徹底し、できるだけ軍隊に入らせないようにすべきだと感じました。

◆海軍兵が叫んでいる映像を見て、率直に言ってなんて馬鹿らしいことをさせているのだと腹立たしく、また悲しさもこみ上げてきました。もちろん、彼らがその道しか、学費を払えない、生活していけないという現実は分かります。それにしても、あまりにも人権・個性を踏みにじる風景に恐ろしくなりました。戦争の犠牲者は銃で撃たれた人はもちろん、撃った人も、その家族もあらゆる人々が犠牲者です。軍がいったい何をして、何を若者にさせようとしているのか。これ以上、誰の目にも涙が浮かばないように、actionをおこさなければこの世界は変えられないと思いました。

◆アメリカの貧困層、アメリカという大国を支えているのは彼らだと思います。私は『華氏911』を見て、兵士は貧困層だ、権力の皮肉、格差を知りこの『アメリカばんざい』はそこに焦点をあてていて、とても興味が湧きました。もっとメディアでは伝えられないマイノリティーな部分を見つめたいと思いました。アメリカという表向きの部分しか現代では見られないと思います。もっと中身、マイノリティーを知る必要があります。

◆テレビなどではなかなか知ることのないアメリカ軍に入隊した人々の経験やそれによる苦悩や厳しい現実についてその一端を知ることができたと思います。戦争でけがを負ったり、家族を殺されたりした人々も、殺してしまった側の人々にも、それぞれの苦しみがあり、そのどちらにも目を向けなければならない、と感じました。

◆「アメリカばんざい」がやがて「日本ばんざい」となる暗い予感がする。そうさせる手段、戦術を考え行動しなければ!

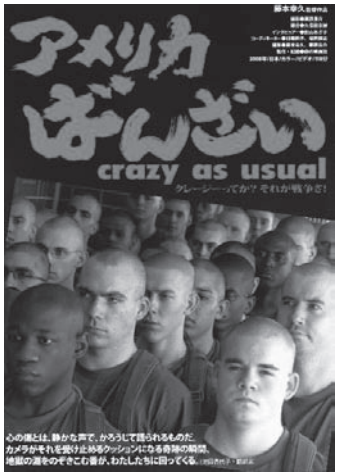
【対談の感想より】

◆PTSDに悩む元軍人は、“人間らしさに苦しんでいる”という言葉が心に残っています。人を殺すということは、それだけダメージを人の心に与えるのだということが理解できました。人間が人間を殺すということが戦地で当たり前になっているが、それに違和感を覚えるというのが人間としての当たり前の姿である。軍人やその家族にしか分からない戦争の悲惨さや命の重さを、こういった映画を通して多くの人々が知る必要があると感じた。

◆藤本監督の、不戦や平和に対する思いが伝わってきました。対談の中でも少し出てきましたが、貧困徴兵制(?)をするために格差が必要っていうように、あってはならないことが全部つながっているように思います。

◆米とは華やかで自由な国という良いイメージを持っていたが、今日話を聞いて変わった。帰還兵の貧困問題、今だ戦争に肯定的(兵器、兵力がある)であること、自由な国という表の顔とは裏腹に、暗い部分があるのだと知った。「兵士(人間)も、人は殺したくない」という言葉は印象深かった。本来殺しあうのを好まないように出来ているはずの人間がやむを得ず戦争に参加し、人を殺す背景とは何か。それを根絶することが平和を考えることの第一歩ともなるのではないかと思いました。

◆アメリカの軍隊の現状や戦争の事実をたくさん知ることができた。戦争に参加した兵士達の心の傷は、当事者にしか分からないんだろうなと思った。戦争によって一番被害を受けるのは、社会的弱者であるし、戦争がはやくなくなってほしいと思った。



公式ちらしより

京都シネマでは8月22日から上映予定。

詳しくは
お電話075-353-4723
または
京都シネマホームページ
http://www.kyotocinema.jp/
でご確認下さい。

常設展示見学者の感想

戦争の苦しさのことが分かった。

（京都府　小学生　男性）

平和ミュージアムに来て、戦争のおそろしさを学びました。関係のない子どもまでぎせいになってとても、かわいそうです。爆弾で、たくさんの人が亡くなったりけがをしたり、とてもかわいそうです。

（京都府　小学生　女性）

戦争のひどさを知れてよかった。

（滋賀県　中学生　男性）

15年戦争の流れが分かりやすく辿れる展示になっていて良かったです。また、実際に触れたり映像などもあり、子どもたちも戦争がどんなものなのかとリアルに感じることができると思いました。今もまだ戦争は終わっていないということが伝わり、これから私たちはどう向き合っていけばよいのか、一人ひとりがじっくり考えられる時間と機会を与えられる、大切な場所だと思います。

（滋賀県　20代　女性　大学生）

痛ましさ、愚かさを改めて思い知らされました。

（兵庫県　60代　女性）

戦争がいかに悲惨でむなしいものであったかをあらためて思い知る事が出来ました。二度とこの様な戦争は、いりません。少しでも体験した者が、その事を忘れずに守っていかなくてはと思いました。

（兵庫県　70代　女性）

映像などで分かりやすく説明している所がいいなと思いました。また、家の中に入り戦争当時の風景を感じられたので良かったです。戦争の本当の恐さが分かりました。これから先ずっと平和でいたいです!!

（京都府　小学生　女性）

戦争はなにがいいのかわからない。

（京都府　中学生　女性）

私は戦争というものが具体的によく分からなかったのですが、平和ミュージアムに来て、いたいと思える程よく分かりました。そして、私は普通に生きて苦もなく生活できる事がどれほど幸せなことかも実感することができました。貧困な場所で生活している子ども達の笑顔を見ると私はすごく幸せなはずなのに小さいことでうじうじ悩み、悲劇のヒロインぶってる自分がとても馬鹿らしく思えました。

（京都府　中学生　女性）

今、私たちは、平和を約束された環境で生活しています。小さな恐怖を感じながら生きてはいても、きっとどこか他人事のように思っているんじゃないか、と思います。戦争の中にいきる人々は、小さな恐怖どころじゃなく、不可こう力で死んでしまうことへの、はかりしれない恐怖、不安、ぞうお、私よりも小さな子どもが感じているんだと思うと胸が苦しくなりました。今の幸せを守るために、小さなことから心がけて皆が皆を思い合い、支えあう世界であってほしい、と強く願います。

（滋賀県　20代　女性）

まだ小学生の私たちが、この展示を見て心に刻まれた事がいっぱいありました。5秒に一人の命がうばわれていると分かって本当にショックでした。私たちが笑っている時、遊んでいる時にこんな事がおきていて。

（京都府　小学生　女性）

平和について考えていきたいと思った。

（富山県　中学生　男性）

すごく、深い。みんなの痛みが伝わった。

（福井県　男性　高校生）

平和のための展示は、いかに真実を伝えるか、また、子どもたちの目にも外国人の目にもふれることが頭をよぎり、難しいですね。まずは疑問を持つことが、本当の平和を求める私たちにとって近道ですから、いろいろな視点でとらえられる展示は貴重だと思います。

（兵庫県　30代　女性）

日ごろは生活に追われているため、当たり前のように繰り返される毎日があることのありがたみ＝それこそ平和な証し＝を忘れてしまっている。時々はここへ来て、平和の尊さや、自分にできることは何か、を考える時間をもちたい。今日は子どもとは来なかったが、次は一緒に連れて来て何かを感じとり考えてほしいと思う。アンケートコーナーに飾られている“子どもたちの笑顔”には、勇気をもらいました。ありがとう。

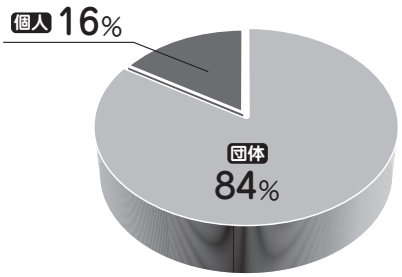
（京都府　40代　女性）

2008年4月 ～2009年3月 入館者状況

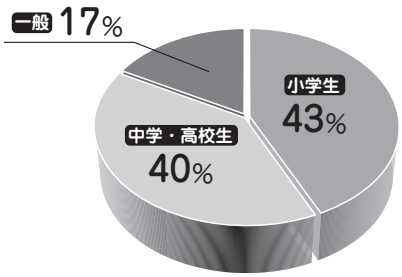
◎開館日数　293日

◎オープン後常設展入館者数累計　638,907名

＜有料団体･個人入館状況＞



＜有料団体入館者数状況＞



2008年度 月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計(名)
常設展	個人(有料)	315	614	696	662	1,442	314	625	668	476	250	310	318	6,690
	団体(有料)	1,016	3,871	3,265	1,838	959	1,711	9,478	6,596	2,253	687	1,443	1,481	34,598
	無　料	751	1,574	980	393	719	130	687	786	763	313	214	444	7,754
	特別展より	53	111	130	120	-	-	273	636	196	-	-	-	1,519
	小　計	2,135	6,170	5,071	3,013	3,120	2,155	11,063	8,686	3,688	1,250	1,967	2,243	50,561
特別展	**春季特別展**　『ベトナム反戦ポスター展　―アーティストからのメッセージ―』											(4/16～7/21)		14,979
	秋季特別展　『世界報道写真展2008 ―WORLD PRESS PHOTO 2008―』													
	立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）会場											(10/1～10/19)		1,738
	立命館大学衣笠キャンパス（KIC）会場											(10/21～11/16)		13,629
	立命館アジア太平洋大学キャンパス（APU）会場											(11/19～11/30)		1,273
	秋季特別展　『昭和20年の中学生展』											(11/21～12/21)		5,563
	小　計													37,182
講演会	**ベトナム反戦ポスター展　―アーティストからのメッセージ―**													
	対談　田島征三氏×安斎育郎名誉館長　『街頭でアートが叫んでいた』											(4/26)		50
	西村繁男氏講演会　『反戦野外展の頃』											(5/17)		81
	連続講座　『ベトナム戦争と私』											(5日間・6/24、6/26、7/4、7/9、7/12)		368
	映画上映会「花はどこへいった」											(7/7)		287
	鼎談　坂田雅子監督×鶴見俊輔氏×安斎育郎名誉館長													140
	映画上映会「靖国 YASUKUNI」											(11/28)		302
	夏休み親子企画　『「へいわ」ってなに?? 2008』											(7/20、7/21)		106
	下見見学会											(6日間・7/30、7/31、8/21、8/27～8/29)		92
	第6回国際平和博物館会議											(10/6～10/8　立命館大学会場)		3,391
	世界報道写真展2008 ―WORLD PRESS PHOTO 2008―													
	中村梧郎氏講演会　『戦争と写真ー“枯葉作戦”から見えるもの』(BKC会場)											(10/28)		321
	対談　中村梧郎氏×安斎育郎名誉館長　『今も続く枯葉剤の悲劇ーアメリカはどう対応したか』											(10/29)		372
	昭和20年の中学生展													
	体験談　『昭和20（1945）年当時のお話を聞いてみませんか？』											(12/6、12/13、12/20)		256
	立命館高等学校吹奏楽ゼミ講座　『クリスマスミニコンサート　小さな音楽会』											(12/21)		137
	小　計													5,903

編集後記

昨年の秋開催された第6回国際平和博物館会議を終え、その報告書も無事完成いたしました。この国際会議を通じて、世界中の平和博物館同士が、お互いにもっと知り合い助け合える間柄になるためにも、今年は大きな飛躍の年にしなければならないということを感じました。そのためにも立命館大学国際平和ミュージアムは、国内の平和構築をめざした人々の功績を次世代の若い人々につなぐ努力をしていかなければなりません。

今季の特別展は、20世紀後半の日本を代表する女流随筆家、『岡部伊都子回顧展』を開催しました。彼女は花鳥風月や衣食住から、戦争・沖縄・差別・環境へと様々な分野を通じて、平和を願い、人間性を追求する発言を貫きました。本展覧会では、婚約者や兄の遺品など平和への原点となる資料とあわせて、少女時代の原稿や伝統的な玩具、鏡台や箪笥・琴など、彼女が2008年4月に亡くなるまで手元に置いていた品々を展示したので、岡部伊都子ファンの方々にもご堪能いただけたと思っております。

これからもまず身近なところで「平和のための博物館づくり」を推進しながら、国際平和社会構築のためにも「平和のための国際平和博物館ネットワーキング」の研究および教育を充実させたいと、スタッフ一同考えております。

どうぞひとりでも多くの方々のご来館とご支援をお願い申し上げます。

ミュージアムインフォメーション

2009年度秋季特別展

南の島の小さな奇跡 フィリピン・カオハガンのキルト展 ～持続可能な経済的自立のあゆみ～

会　期／2009年10月１日（木）～10月31日（土）　9:30～16:30（入館は16:00まで）
会　場／立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
休館日／月曜日（10月5日、10月19日、10月26日）・10月13日（10月12日は開館）
参観料／大人400円（350円）中高生300円（250円）小学生200円（150円）
上記（　）内は20名以上の団体料金です。
特別展の入館料で常設展も併せてご覧いただけます。

「椰子の木」エルニン・パラン作／2009年

展示内容 フィリピンのセブ島沖にあるカオハガン島は、周囲2kmの小さな島です。1991年にこの地に移り住んだ崎山克彦氏は、1995年「南の島から」の活動を開始しました。以来、電気も水道もトイレもなかった島で、衛生、医療、教育を中心とした「持続可能な自立」を目指す取り組みを進めています。

また1996年から吉川順子氏の指導により、島民たちはキルト製作を始めました。島民たちは、基本的な縫製の方法を学ぶと、独特な色彩感覚、想像力、世界観に裏付けられた素晴らしい作品を独自に生み出し、日本でも注目されるようになりました。カオハガンキルトは、フェアトレードによって販売され、今ではキルトの販売収入が、島の全収入の1/3を占めています。

この展覧会では、吉川順子氏が保存してきたカオハガンキルトのコレクション、島の生活の様子を伝える品々、カオハガン島をテーマに作品を発表してきた写真家・熊切圭介氏（日本写真家協会副会長）の作品をあわせて約50点展示します。

島の生活、環境、文化、そしてカオハガンキルトをはじめとした取り組みを紹介するとともに、国境を越えたフェアトレードやエコツーリズムの可能性について考えるきっかけを提供する企画とします。

主　催／立命館大学国際平和ミュージアム

後　援／在大阪・神戸フィリピン共和国総領事館、外務省、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社、α-STATION FM KYOTO、NPO京都コミュニティ放送

講演会のお知らせ

2009年10月10日（土）　14：00～15：20
会　場／立命館大学国際平和ミュージアム　１階ロビー

第一部　写真家・熊切圭介氏　講演
カオハガン島の写真を発表する熊切氏によるお話

第二部　パネリストによるトーク
カオハガン島でキルト作成指導をする吉川順子氏、島のオーナー崎山克彦氏、島出身のジュディス・タリー氏、エコツーリズムを専門とする小方昌勝氏が、島の歩みや、エコツーリズムについて語ります。コーディネーター・京都大学教授　清水展氏。

※市民参加企画として、キルトの一般募集を行い、特別展期間中ロビーにて展示をいたします。
※キルト作品（30㎝×30㎝）募集中です。9月15日最終締切です。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

秋季特別展

世界報道写真展2009～WORLD PRESS PHOTO 2009～

北海道［札幌三越］

会　　期：2009年９月12日（土）～2009年９月21日（月）　会期中無休
会　　場：札幌三越　本館10階 特設会場
開館時間：10時～19時
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生以下無料
主　　催：世界報道写真展2009北海道実行委員会、
立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、
世界報道写真財団
後　　援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、
社団法人日本写真家協会、北海道、北海道教育委員会、
札幌市、札幌市教育委員会、江別市、江別市教育委員会、
北広島市、北広島教育委員会、石狩市、石狩市教育委員会、
NHK札幌放送局、北海道放送株式会社、
北海道テレビ放送株式会社、北海道高等学校文化連盟、
北星学園大学・北星学園大学短期大学部、札幌ユネスコ協会

〔世界報道写真大賞〕アンソニー・スアウ（アメリカ）
アメリカの経済危機一立ち退きを言い渡された住民が家に残っていないことを確認してまわる警察官ロバート・コール
3月26日、オハイオ州クリーブランド　タイム誌

大分［立命館アジア太平洋大学（APU）］

会　　期：2009年10月１日（木）～2009年10月14日（水）　会期中無休
会　　場：立命館アジア太平洋大学（APU）　本部棟２階　コンベンションホール
開館時間：10時～17時（入館は16時30分まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生以下無料
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団
後　　援：大分県、大分県教育委員会、別府市、別府市教育委員会、NHK大分放送局

滋賀［立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）］

会　　期：2009年10月17日（土）～2009年11月１日（日）　会期中無休
会　　場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）エポックホール
開館時間：９時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

京都［立命館大学衣笠キャンパス］

会　　期：2009年11月３日（火）～2009年11月29日（日）※11月4日、９日、16日、24日は休館です
会　　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
開館時間：９時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団
後　　援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、滋賀県、滋賀県教育委員会、
（滋賀・京都開催分）草津市、草津市教育委員会、大津市、大津市教育委員会、びわ湖放送株式会社
NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）京都府、京都府教育委員会、京都市、
京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）

協　　賛：キヤノン株式会社、キヤノンマーケティングジャパン株式会社、
ティ エヌ ティ エクスプレス株式会社
北海道協賛：（五十音順）医療法人タナカメディカル札幌田中病院、学校法人北海学園(北海学園大学・北海商科大学)、
株式会社ＤＮＰ北海道、株式会社ＪＡサービス帯広かわにし、株式会社ＪＴＢ北海道札幌支店、
株式会社アークス、株式会社紀伊國屋書店、株式会社共立メンテナンス札幌支店、株式会社きんでん
株式会社熊谷組北海道支店、株式会社クレオテック北海道事業部、株式会社ジュンク堂書店、
株式会社ダイヤ書房、株式会社ニッセンレンエスコート、株式会社ニトリ、
キヤノンマーケティングジャパン株式会社札幌支店、札幌グリーンライオンズクラブ、
北海道旅客鉄道株式会社、立命館慶祥中学校・高等学校教育振興会

第17巻第１号（通巻47号）　2009年８月11日発行

立命館大学
国際平和ミュージアムだより

編集・発行者
立命館大学
国際平和ミュージアム
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151　FAX. 075-465-7899
http://www.ritsumei.ac.jp/